

資料『源氏物語 横笛』

(奥賣家文書2999「源氏物語(よし笛)(源氏四十九才一月迄ノ事アリ)(写本)」「近世」)

3丁裏

秋の夕の物あはれるるに

一条の宮をおもひやり

きこえ給ひてわたり給へり、うちとけしめやかに 御琴どもなどひき給程成べし

ゆくえうやくやまとまへり、冬ぞとじよがぬかでし

ふかくもえとりやらでやがてそのみなみのひさしにいれ奉給へりはしつかた成つる人の

かく入つまといじもくまねひとうひだく、宵いもじくむく

るさり入つるけはひども しるくきぬのをとなひも、大かたの匂ひかうばしく、心にくき

社うち例のミヤヒト村あらそいて、君のゆゆびすくりゆづき

程なり、例のみやす所対面し給ひて、 昔の物語ども聞えかはし給、 わが御との

明くれ人しげく物さはがしく、おさなき君達など すだきあはて給にならひ給て

ゆくえくわくじらわいよつらとくとうとくとくとくとく

いと静にものあはれ也、 うちあれたらる心ちすれど、あてにけたかくすみなしたまひて、

お裁のじきのホーときやべくまくまくとまつておわせ

前裁の花ども、 へ虫のねしげきのべとみたれたる 夕ばへを、みわたし給、和琴を

ひきよせ給へれば、りちにしらべられて、いとよくひきならしたる、ひとがにしやみて、

さうにまわすにまづくへんづじふて

なつかしうおぼゆ、かやうなるあたりに、おもひのまゝ成すき心ある人は、しづむること

まくくみかきとわり、まゆ、まねとつゞく、どがひ

なくて、さまあしきけはひをもあらはし、さるまじき名をもたつるぞかしなど、おもひ

つけつゝかきならし給ふ、故君の常に

ひき給ひしこと也けり、おかしき手ひとつ

などすこし引給ひて、哀いとめづらか成ねに、タ詞かきならし給ひしはや、この御こと

4丁表

かきくまくわし、わち、わち、まくのまくとくに、のらむ
にもこもりて侍らむかし、承あらはしてしがなどの給へば、ことのをたえにしのちより、
じーのまくわまじのまくとくに、まくのまくとくに、院のま

むかしの御わらは、あそびの名残をだに、思出給はずなん成にて侍める、院のお

まへにて、女宮たちのとりぐの御ことども、心み聞え給ひしにも、かやうのかたはおぼ
めかしからず物し給ふとなむ、さだめ聞え給めりしを、あらぬさまにほれぐしう成て、
まくとくまくとくに、まくとくに、まくとくに、まくとくに、

ながめすぐし給ふめれば、世のうきつまにといふやうになむみ給ふると、聞え給へば、

ならし給へるも、おくふかきこゑなるに、いとゞ心とまりはてゝ、中くにもおほゆれば、

良邑と云ふ一セセト、ハシタツト、カネト、おもむきといふよしとくじやく

琵琶を取よせて、
いとなつかしきねに、想夫恋を
ひき給ふ、おもひをよびがほ

وَلِمَنْدَلْتَهُ وَلِمَنْدَلْتَهُ وَلِمَنْدَلْتَهُ

是はことゝはせ給ふべくやとて、せちにすのうちを

そぢのかし聞え給へど、ましてつゝましきせしいらへなれば、宮はたゞものゝみあは

卷之三

れとおぼしつじけたるに

ことに出ていはぬをいふにまさるとは人にはぢたるけしきをば見る

الله ربنا وربكم نحن ندعكم
نحوكم ندعكم نحن ندعكم
نحوكم ندعكم نحن ندعكم

ときこえ給ふに、たゞす急つかたをいさゝかひき給

ふかき夜のあはればかりはきゝわけどことより外にえやはいひける

※日本文学(中古)の通例に合わせ、カタカナは変体仮名として扱い、ひらがなで表記しています。